

日本・ポーランド国交樹立 100 周年記念 ショパン 200 年の肖像

練馬区立美術館 2020. 06. 02～06. 28

静岡市立美術館 08. 01～09. 22



「フレデリック・フランソワ・ショパン」(1810～1849)は、ポーランド出身の世界中で愛され続ける前期ロマン派音楽を代表する作曲家で、作曲はほとんど「ピアノ独奏曲」が占め“ピアノの詩人”と呼ばれるようになった。彼は、様々な形式・美しい旋律・半音階的和声法などによってピアノの表現様式を拡大し、ピアノ音楽の新しい地平を切り開いて、「夜想曲」や「ワルツ」などの名作曲したことが知られている。

本展覧会は、ポーランドの「国立フレデリック・ショパン研究所」の全面協力で開催される世界を巡回する催事で、展覧会の展示内容は、彼の音楽と生涯を主軸に自筆の楽譜、手紙、油彩画、版画、ポスター、彫刻、書籍などの多彩な美術作品や資料を通じて、生誕 200 年にわたるショパン像を紹介している。



アリ・シェフェール《フリデリク・ショパンの肖像》1847年油彩/カンヴァス

ショパンの友人「シェフェール」画家による30代後半の肖像画の作品である。

マルチン・ザレスキ《ヴィエジェフノからのポーランド軍部隊の帰還》1831年

ショパンがワルシャワを去って、ほぼ1か月後のクラコフスキェ・ブシェドミェシチェ通りの風景で、ここでは反ロシアが勃発した後、コンスタンティン大公を見舞って帰還したポーランド軍部隊を、ワルシャワ市民が熱烈に歓迎している様子が描かれている。ショパンは異国でその状況を一喜一憂することになる。

この催事は、練馬では「公益財団法人練馬区文化振興協会」が展覧会の開催に合わせて、様々な視点から「ショパン」を楽しんでもらえるよう、コンサート、映画、講演などを練馬区の各文化施設で、それぞれの特性を活かした「ショパンをテーマにした多彩なイベント」を展開しているのが大きな特徴である。